

週刊 武四郎

第27号

2018年(平成30年)10月10日(水)
発行・松阪市

●毎月第二週は、
松浦武四郎と北海道に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

クマと武四郎



▲「蝦夷山海名産図会」より（松浦武四郎記念館蔵）

松浦武四郎は幕末期に六回も

蝦夷地を探検しています。道な

き道の原野を歩くわけですから

宿屋もなく、アイヌの家に泊め

てもらったり……基本は野宿で

した。地図も道もなく、夜は当

然のことながら真っ暗な中で、

クマやシカなど野生動物が怖く

はなかったのでしょうか。

武四郎さんは、最初の蝦夷地
探検のことを記した『初航蝦夷
日誌』の中に、こんな風に書い
ています（以下、『随筆松浦武四

郎』より吉田武三訳）。

「朝霧の峠を下り始めたところ

で丈四尺（約1メートル

半）ばかりの熊が、頭を振っ

て坂の下から上ってきた。あ

わてて三尺ほど後に退つて、

いきなり右の熊笹の中に飛

び込んで七、八間下の道に走

り下った。ようやく平地に出

て始めて身震いがして恐怖を

感じた。その平地には小川が

あり、フト見るとその川端に

またもや一頭の熊が水を飲ん

でいる。スワ今度こそはもう
助からないと思つて、五、六歩
後ずさりながら笹の下影か
らよくよく見ると、それは大
きい黒石だった」

以来、岩を見ても木の根を見
てもクマに見えて仕方なかつた
と武四郎さんは記しています。
それが、『傑士松浦北海翁』（北
海タイムズ 明治四十四年連載）
の中では、古老の談話として、

「二大巨熊巨岩の蔭に突起ち
居りて此方を振り返り今にも
躍りかゝらん有様なのに、翁

（注・武四郎のこと）も一時は
呀と驚きしも元より度胸の太

き翁の事として平然彼を凝視せ
しかば、熊は其儘踵を返して

逃げ去つた」

と、ずいぶん勇ましくなってい
ます。

ちなみに、『クマにあつたらど
うするか』（ちくま文庫）という
本で、アイヌ民族最後の狩人
姉崎等さんは、クマにあつたら
ぜったいに逃げてはいけない、

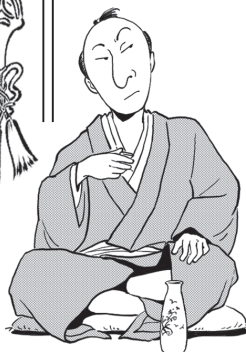
と語っています。

「逃げるといつては自分の命は
いらぬよというサインをクマ
に送るのと同じことです」

ではどうするかというと、動
じず目をそらすさずクマを凝視し
て腹の底から「ウォー」と大声
を出すのだそうです。はからず
も古老の語つた武四郎さんの行
動と同じです。はじめは逃げ回っ
ていた武四郎さんも、次第にア
イヌに伝わる知恵を身につけて
いったのかもしれない。

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけ
ての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地（今
の北海道）を6度にわたり探査し、アイ
ヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細
な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷
地に代わる新たな名称として（北海道）
のもととなる（北加伊道）を含む6案
を政府に提案したことから（北海道の名
付け親）と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』（河治和香著）が、小学館より好評発売中！

